白い花弁の流れる先　36

川鍋さく

メトロノームを聴いた日

朝の予報を信じて
傘を持って来なかった
放課後
爽快な天気雨に降られた

渡り廊下の屋根の下から
少しだけ顔を出して
きらきらと落下する雨粒を見ると
青空と、まだ淡い西陽の色が
反射して眼に入ってくる
ように思えた

向かいの校舎の二階
第一音楽室の角の窓が
今日も開いている

雨粒が
地面に着地した衝撃で
方解石のように
並行六面体に細かく割れて
散り跳ねて

カチカチと音がする

＊＊ 川鍋のぶつぶつ独り言 ＊＊

先日、友人と夜に長電話をしました。その友人と電話をするといつも３、４時間平気で話してしまうのですが、その日はとうとうお互いに通話を繋いだまま寝落ちしてしまい、朝方ふと目が覚めてスマホを見るとまだ通話が切れていませんでした。スマホのスピーカーから静かに友人の寝息が聞こえてきて、そういえば自分以外の誰かの寝息を間近に聞くのはとても久しぶりだということにはたと気が付きました。不思議な安心感があるものですね。

その時に、私が幼少期から高校時代を過ごした実家に居た「何か」のことを思いだしました。母親の寝室に、ウォークインクローゼットと呼ぶには小さいけれど一応小さな個室になっている収納部屋があって、その収納部屋には姿の見えない「何か」が棲んでいました。私が学校を休んで母親の寝室で寝ていた時などに、その収納部屋からその「何か」の寝息がよく聞こえていました。私だけでなく兄もその寝息をよく聞いていたのですが、母親には全く聞こえなかったようです。とくに怖いと感じることもなく、寝息が聞こえる以外の怪奇現象のようなものはなかったので、何か悪さをするような存在ではなかったのだと思います。私も兄も、その「何か」を収納部屋の主のような存在として心に置いていました。

その家はもう手放して新しい住人がいるので、収納部屋が今どうなっているのか、主は今もそこに居るのか、わかりません。でも、今も変わらず、元気で穏やかに眠っているといいなと思います。